

獣医領域からみた人獣共通真菌症の問題点

高 鳥 浩 介¹ 小 菅 旬 子²

¹ 国立医薬品食品衛生研究所衛生微生物部

² 宮崎大学農学部家畜微生物学教室

要 旨

近年、我が国ではペットや家畜から感染する様々な人獣共通真菌症が問題視されるようになった。これらの人獣共通真菌症の発生の背景には、人と動物の関わりを取り巻く複雑な社会事情があることから、医師や獣医師のような異なる分野間で連携して病気の蔓延の防除に努めることが重要である。

Key words: 動物 (animal), 人 (human), 人獣共通真菌症 (mycotic zoonoses), 獣医療 (veterinary medicine)

はじめに

近年、人と動物の関わり方は様々に変化し、多様化する方向にある。例えば、高齢化社会や都会生活における犬や猫は、単なる愛玩動物ではなく、家族の一員として、人生の伴侶として存在そのものが重要視されるようになってきた。すなわち、ペットからコンパニオンアニマルと言われるようになった所以である。その一方で、貴重な労働力ないし収入源であった牛は、食料としての利用価値のみが高まり、経済性が追求されるようになった。

人と動物の関係が変化することによって、動物あるいは共に生きる人の健康を考慮した場合、新たな問題が生じる恐れがでてきた。人獣共通真菌症もその一つであり¹⁾、医学および獣医学の両分野において、今後益々注目されることになるだろう。

動物から人への感染を防除する方法として最も単純なのは、人と動物の関係を完全に絶つことである。しかし、強く密着した両者の複雑な関係を切り離し、完全に住み分けることは不可能であり、それによる弊害の方がはるかに大きいと思われる。むしろ関係を継続しつつも、感染症の発生の背景にある諸事情を知り、問題点を明らかにすることによって予防策を講じることが最良の方法といえる。

ここでは、犬や猫などの小動物と牛に焦点をあて、昨今の獣医領域からみた人獣共通真菌症の問題点について述べる。

1. 犬、猫などの小動物

犬や猫などのペット動物から人へ感染する真菌症としては、皮膚糸状菌症などがよく知られている^{2, 3)}。ペッ

トの飼育者やその家族、獣医師など、動物と直接触れる機会の多い人は感染の危険性が高い。

近年、都会の住宅事情や少子高齢化などの社会事情を背景に、動物を家族の一員として屋内で飼育する家庭が増えている。このような飼育環境では人と動物の密着性が増すことから、人獣共通感染症の感染機会の増大が危惧されている^{2, 3)}。しかし、屋内飼育の動物は概して清潔に管理されており、屋外に出る機会が少ないことから、外から病原体を持ち込む恐れが少ないこと、感染しても早期に発見、治療が可能であり、人への伝播を防除しやすいことなどから、動物と密着した生活が必ずしも人獣共通感染症の増加要因になるとはいえない。真菌症の場合とくに、自然環境や他の個体から感染することが多いことから、屋外に出さずに飼育することは、効果的な予防策の一つといえる。人獣共通真菌症の発生や、動物から人への伝播は、屋外飼育か屋内飼育かに関わらず、適切な飼育法や衛生管理によって避けられるものが多い。従って、人と動物双方の健康のために、飼育者は感染症に対する知識を持ち、可能な限りの予防策を講じる必要があると思われる。

一方、昨今のペットブームを背景に、犬や猫以外の小型ほ乳類や虫類などを飼育する家庭も増えている。これらの小動物は、鳴かない、臭いがしない、飼いやすいといった特徴から、集合住宅などで単身者や子供のペットとして好んで飼育されている。しかし、最近になってペットとして飼育される齧歯類が *Trichophyton mentagrophytes* の保菌動物として注目され、人への感染例も報告されている^{4, 6)}。また、海外からペット用として輸入される珍獣が、どのような病原体を保有しているかは明らかでない。このような輸入ペットに起因した輸入真菌症が今後国内で発生することも懸念される。

近年、医療の現場において動物介在活動 (Animal assisted activity : AAA) および動物介在療法 (Animal assisted therapy : AAT) と呼ばれるプログラムが注目

別刷請求先：高鳥 浩介

〒158-8501 東京都世田谷区上用賀 1-18-1
国立医薬品食品衛生研究所衛生微生物部

されている。レクリエーションなどを通じて動物と触れ合うことや、動物との触れ合いを高齢者や心身障害者の治療に役立てようというものであるが、これらの対象者の中には、感染症に対してハイリスクな患者が含まれていることを忘れてはならない。AAAやAATには、犬や猫以外に馬、ウサギ、モルモットなど様々な動物が用いられるが、これらの動物の保菌状況の把握は、安全なプログラムの実施上必要不可欠である。しかし、現時点では病原性真菌に対する配慮は十分なされていないとはいえず、今後、このような分野においても適切な真菌の検査態勢が整えられることが望まれる。

犬や猫などの小動物が身近にいることによって得られる心のやすらぎについては、今更説明するまでもない。ペット動物から感染する感染症の問題は少なくないが、それでもなお、我々がこれらの動物を必要とするならば、共存する道を模索するほかないであろう。いたずらにペット動物を感染源として恐れるのではなく、正しい知識と予防法を普及させることによって、人と動物のより良い関係を構築していくことが望まれる。

2. 牛

牛から人へ感染する真菌症としては *Trichophyton verrucosum* による皮膚糸状菌症が最も重要であり⁷⁾、牛と接する機会の多い畜産関係者は感染する危険性が高い。畜産関係者は、本症を職業病と捉えているため、軽症では皮膚科を受診しないことが多く、医学統計上実際の患者数を明らかにすることは難しい。しかし近年、地方の畜産現場において牛皮膚糸状菌症の発生が増加の傾向にあるといわれていることから、それに伴う人の患者数の増加が危惧される。とくに大規模農家が多い地区では、本症は下痢、肺炎と並んで子牛に最も多くみられる疾病の一つであり、罹患牛は成長が遅れることから、乳肉の生産性の面からも問題である。しかし、皮膚糸状菌症多発農家の中には本症に対する問題意識が薄く、自然治癒することを理由に放置しているところも少なくない。

本症が多発する背景には様々な社会事情があると思われる。中でもとくに、輸入肉の増加や運搬技術の進歩などに伴って、乳肉の価格競争が激しくなったことから、コスト削減を余儀なくされた生産現場では、農家一戸当たりの飼育頭数が増加する傾向にあり、これが最も根本的な問題と考えられる。飼育頭数が増え、牛舎内で密飼いするようになると、牛はストレスから体調を崩し、様々な疾病に罹患しやすくなる。また、著しい飼育頭数の増加に対し、労働力も飼育技術も不足しているため

に、個体管理が行き届かない農家が多い。これらの結果として、皮膚糸状菌症をはじめとする様々な疾病が多発し、獣医師はその対処に追われているのが現状である。しかも、皮膚糸状菌症が蔓延した農家を、畜舎の消毒や罹患牛の治療によって清浄化することは容易ではなく、感染源が存在し続けることは公衆衛生上も問題である。この問題を解決するためには、畜舎の消毒や罹患牛の隔離、治療を行うと同時に、あらためてその農家の飼育管理の状態を見直し、皮膚糸状菌症の発生要因を改善すること、人獣共通真菌症としての重要性を認識させる必要がある。

経済性第一の飼育法を続ければ、皮膚糸状菌症のような感染性の強い疾病の発生は今後益々増加していくことだろう。しかし、現在の日本の状況では、家畜の生理にあった自然な飼育法では採算が合わず、経営を成り立たせることは困難である。牛皮膚糸状菌症の蔓延は、現在の日本の農業が抱える問題を凝縮して表しているといえるだろう。人と家畜の健康のためには、食の在り方や経済的背景など、幅広い視野をもとにした取り組みが必要と考えられる。

以上、獣医領域からみた、人獣共通真菌症をとりまく諸事情について述べた。人獣共通真菌症の発生の背景は、人と動物双方の条件が関与するためより複雑である。このような疾病に対しては、異なる分野間、例えば医師と獣医師の間などで情報を頻繁に交換しあい、連携して予防に努めることが重要と思われる。

引用文献

- 1) 小菅旬子, 高鳥浩介: 獣医畜産領域における真菌検査法 (1). 獣畜新報 50: 471-474, 1997.
- 2) 高鳥浩介: 真菌性ズーノーシス. 日獣会誌 50: 691-699, 1997.
- 3) 中村遊香, 渡辺晋一, 長谷川篤彦: 人と動物に感染する皮膚真菌症. 真菌誌 40: 9-14, 1999.
- 4) 長谷川篤彦: 自然環境中の皮膚糸状菌. 真菌誌 38: 23-27, 1997.
- 5) 飯塚崇志, 二宮淳也, 浜口太造, 長瀬真智子, 滝内石夫: 兎から感染したと思われる *Trichophyton mentagrophytes* による白癬の2例. 真菌誌 38: 247-252, 1997.
- 6) 畑 康樹, 天谷雅行, 仲 弥, 原田玲子, 西川武二: ハムスターおよびチンチラより感染した *Trichophyton mentagrophytes* によるケルズス禿瘡と体部白癬. 真菌誌 41: 269-273, 2000.
- 7) 高橋伸也: *Trichophyton verrucosum* による白癬について. 真菌誌 16: 1-10, 1975.

Some Remarks on Mycotic Zoonoses from Veterinary Medicine

Kosuke Takatori¹, Junko Kosuge²

¹Division of Microbiology, National Institute of Health Sciences
1-18-1 Kamiyoga, Setagaya-ku, Tokyo 158-8501, Japan

²Department of Veterinary Microbiology, Miyazaki University
1-1 Gakuen-kibanadai-nishi, Miyazaki 889-2192, Japan

Various mycotic zoonoses of human transmitted from animals have recently been viewed as a serious matter. The outbreaks of these diseases under many complicated circumstances occur in the community between human and animals. Cooperation is needed to prevent the expansion of infections of zoonoses by both human and veterinary medicine.

この論文は、第46回日本医真菌学会総会の“シンポジウムIV: 人獣共通真菌症の動向”において発表されたものです。